学生の学修成果を把握する仕組みを考える

瀧 崎 優 佳
今 泉 仁 志

抄録

ディプロマ・ポリシーに定めている学修目標がきちんと達成されているのか、学修成果を可視化することが求められるようになってきた。知識の定着を評価するなら従来の筆記試験で十分だが、実社会が求める社会人基礎力に代表されるような主体性や実行力を評価するには筆記試験を含め多面的に評価する必要がある。教育手法にも能動的学修（アクティブラーニング）が推奨されるため、筆記試験以外の評価方法を取り入れなければならない。一方、従来からのGPAの計算方法では厳格な評価ができないという意見が出て、素点そのものでGPAを計算する動きもある。特に、グループワークやプレゼンテーション、フィールドワークなどを取り入れる能動的学修においては、いわゆるパフォーマンス評価をする必要があり、素点そのものの厳格性・公平性を担保するためにも、評価手法・基準を公開していかなければならない。

この論文では、キャリアプランニング科における学修成果の可視化への取組について論じている。

キーワード

学修成果の可視化 ルーブリック評価

I. はじめに

3つのポリシーに加え、アセスメント・ポリシーをホームページで公開する大学・短大が増え始めた。

アセスメント・ポリシーには、点検・評価の目的、達成すべき質的基準及び具体的実施方法を記述する。

他大学の取組では、評価指標を明示してはいるが、評価結果とそれを活かした改善活動までは公開していない。アセスメント・ポリシーも、大学全体／学部レベル／学科レベルという階層構造を持つもの、学科からさらに、授業科目レベル、学生個人レベルまで展開しているものまである。何を評価するのかという点からも、3つのポリシーそのものをそれぞれ評

価するものから、教育過程（入学時／在学時／卒業時／卒業後）で実施する評価、学生本人の学修成果を評価するものまである。

このように、アセスメント・ポリシーで求められるものは、学科組織としての「教育成果」と学生個人が獲得した「学修成果」に大別できる。その2つの領域で、成果を把握・可視化し、さらには情報公開することが求められるようになった。

学科組織としての教育成果の把握方法として、単位取得状況やGPAの分布・学修行動調査があり、授業科目レベルでは、学生による授業評価アンケートとそれに対する教員側からのFDシートの作成、教員同士の相互授業参観を実施してきている。

学生の学修成果を把握するものとして代表的なアセスメント・ポリシーは、科のディプロマ・ポリシーに示す能力の修得達成度状況を個人レベルで評価するものである。この取組自体そのものが、これまでは不十分だった。おまけに、実社会から「主体性」や「実行力」の育成が求められ、従来の座学中心の授業を踏襲し、筆記試験中心で学修成果を評価するだけでは時代の要請に答えられなくなっている。能動的学修形態にするために、グループワーク、プレゼンテーション、フィールドワークなどを教育活動に取り入れ、従来とは異なる評価をしなければならない。

この論文では、学生個人の学修成果を把握し、可視化する仕組みを考察する。

II. 学生個人の学修成果を把握するためのアセスメント・ポリシー

キャリアプランニング科の自己点検・評価活動では、PDCAサイクルを機能させ教育改善に努めてきたが、個々の学生の学修成果の達成度評価としてのチェック機能は弱く、結果として効果的なFD活動に結びつくまでには至らなかった。これまでの努力としては、カリキュラムマップを作成することにより、個々の開講科目が達成すべき目標を、科の目標に対応させてきた。学生が受講する科目の学修成果の総合評価であるGPAで、科の目標の達成度合いを評価できるとしてきたが、それだけでは不十分な面も実感している。

本科のディプロマ・ポリシーは、以下のとおりである。

1. 必修科目群からなる就業力育成コアユニットの学修により、社会人基礎力を養い、汎用性のある一般事務能力を身につけている。
2. 一般教養科目の学修により、人間・社会・自然に対する理解を深め、幅広い教養を身につけている。
3. 自分で選択した専門ユニットにおける体系的学修と隣接分野を含む多様な学修により、応用のきく専門性を身につけている。

強調のため引いた下線部分に学修成果としての達成目標を書いてあるので、その達成度を評価する必要がある。まとめると、第1表の第1列の学修目標になる。この論文では、学修目標1の社会人基礎力・一般事務能力を評価対象にする。教養分野と専門分野は今後の検討課題とする。

第1表 教育成果・学修成果の把握・可視化

ディプロマ・ポリシーに定められた学修目標		個々の資質・能力のエビデンスとなる情報
学修目標1 社会人基礎力 一般事務能力	←	授業科目における達成目標の達成状況 ビジネス実務総論, ビジネス実務演習 接遇演習, ライフ・コーディネート
学修目標2 幅広い教養		※今後の検討課題
学修目標3 応用のきく専門性		※今後の検討課題

※アセスメント・ポリシーは、ディプロマ・ポリシーが実現できている度合いを検証するための具体的なアセスメント・プランである。当然のことながら、3つのポリシーを見直す契機ともなるものである。

Ⅲ. 学修目標1（社会人基礎力・一般事務能力）のアセスメント

キャリアプランニング科は、2019年度から、3つのコース（ビジネス・秘書コース、公務員コース、医療事務コース）からなるクラス編成とした。3つとも事務系のコースである。3つのコースに共通する必修科目群として「就業力育成コアユニット」を用意している。その中でも、事務職教育の中心となるのが「ビジネス実務総論」（1年次春学期）、「ビジネス実務演習」（1年次秋学期）、「接遇演習」（2年次春学期）、「ライフ・コーディネート」（2年次秋学期）であり、これらすべての科目を1人の専任教員・瀧崎が担当している。これらの授業科目群は2年間に渡っており、同一教員の一貫した教育ということから評価のブレが少ないと考えられ、学修成果の把握に利用することを考えた。

Ⅳ. 多様な評価方法の採用

アセスメントの指標を考える際に、いろいろなところで挙げられている基礎力を参考にした。

- ・経済産業省の「社会人基礎力」
- ・リアセックと河合塾の「PROG」リテラシーとコンピテンシー
- ・実務教育協会によるアンケート調査結果

新卒時点で求められる汎用能力

- (1) 対話・対応力 適切な「聞く」「話す」ができる力
- (2) 好感獲得力 他者に好意的な印象を与えられる力
- (3) 吸収力 外界の情報を柔軟に自分のものとする力
- (4) 継続力 粘り強く、頑張り続けられる力

ビジネス実務で求められる汎用能力

気づく力、計画・実行する力、周囲を巻き込む力、周囲を観察し、協調しながら問題解決する力

IV-1. 新たなGPAの検討

これまでの学修評価には、GPAを活用してきている。現状のGPAは、100点満点の素点を秀4・優3・良2・可1・不可0の5段階に丸めて積算しているので、素点の合計から計算する厳密な順位とは異なっている。同一段階で高得点の学生ほどGPA値が下がり、逆に、低い得点の学生ほどGPA値が上がっている。本学では、全学FD講習会で、御茶ノ水女子大学が採用しているfunctional GPAを学習した。2020年度から、素点を基に厳密なGPA計算を検討予定である。計算方法の改善以前に、各授業科目間の素点の公平性を議論する必要もあり、GPAに偏っていた学修成果の把握を改善していく。

IV-2. ルーブリックの検討

Ⅲで言及した授業科目においては、能動的学習を積極的に採用している。プレゼンテーションの訓練として人前での新聞記事発表、理解度を確認する頻繁な小テストの実施と結果のフィードバック、グループディスカッション、ロールプレイ実践、課題解決型の授業を実施し、実社会への適応能力を把握し、向上させている。

いわゆるパフォーマンス評価を実施するために、ルーブリックを試作した。以下に、3つの科目のルーブリック（試案）を示すが、評価に使用しながら改善していく予定である。

ルーブリックを活用して学生の学修成果の把握や動機付けに利用するつもりだが、ルーブリックに書いてある評価項目以外のことをしなくなるという弊害も指摘されている。一般に、努力した先に得られるものが決まっていたら、それを最小の努力で獲得しようとする傾向がある。もちろん、明示しない達成目標も存在し、未知のもの、新しいものを学ぶというワクワク感にも配慮していく。

第2表 「ビジネス実務総論」ルーブリック評価表（試案）

評価項目		評価基準					
		0点	1点	2点	3点	4点	5点
実務に対する取り組み	1.社会に目を向け、実務に対する取り組みができる	新聞・ニュースを全く見ない	ニュース・新聞をたまに見る	ニュース・新聞は見るがまとめていない	ニュース・新聞を見てまとめることができる	ニュース・新聞をまとめて私見を記載している	ニュース・新聞をまとめて私見を発表できる
	2.ビジネス実務に必要な挨拶ができる	しようとする気もなく、全くできない	しようとする気はあるができない	しようとする気はあり、人からされればややできる	しようとする気持ちもあり、人からされればやる	挨拶はするが積極性は十分ではない	積極的に自ら明るい挨拶ができる
	3. ビジネス実務に必要な立ち居振る舞いができる	理解しておらずできない	理解はできているができない	理解はできているが実技も少しできる	理解はでき、実技もできるが動きが緩慢である	理解はでき実技もできるが感じの良さに欠ける	理解しており感じよくできる
	4. 実務に必要な電話応対ができる	知識もなくできない	知識はあるが実技はできない	知識はあり実技も少しできる	知識はあり実技も型通りならできる	知識はあり実技もできるが感じの良さが不十分	知識もあり感じよく電話応対ができる
	5. ビジネスに必要な名刺交換などの具体的な動作ができる	知識もなくできない	知識はあるが実技はできない	知識はあり実技も少しできる	知識はあり実技も型通りならできる	知識はあり実技もできるが感じの良さが不十分	知識もあり感じよく応対ができる
	6. 社会に出る意識と準備が整っている	意識も低く、準備も全くできていない	就職に対する意識はあるが準備はできていない	意識はあり、準備もやや始めている	意識はあり、準備もある程度はできている	意識は高いが準備もできていないがやや不十分	意識も高く準備もしっかり整っている
ペア・グループ演習への取り組み	1.傾聴力	目を合わせず、他のことをしているなど聴いていない	聴いてはいるが目を合わせず傾きもない	目を合わせて聞いているが傾きはない	目を合わせ、傾くなどして話は聴いているが表情が硬い	目を合わせ、傾くなどして柔らかい表情で聴くことができるが、質問などではない	目を合わせ、傾くなどして柔らかい表情で聴くことができ、興味を持って質問などもできる
	2.積極性	積極性がなくペアワークでも全く話をしない	しかたなくペアワークでは隣と話す	ペアワークでは話すがグループワークでは自ら発言しない	ペアワーク、グループワークともに発言するが、やや積極性に欠ける	ペアワーク、グループワークともに積極的に発言するが、代表としても発表するなどはしない	ペアワーク、グループワークともに積極的に発言し、代表としても積極的に発表する
	3.課題に積極的に取り組んでいる	課題を提出しない	半分程度の課題提出しかできておらず、内容も不十分	時々課題の提出を忘れ、内容も不十分である	課題は忘れず提出するが内容は充分と言えない	課題は忘れず提出するが内容はやや理解度に欠ける	課題を忘れず提出し、内容も理解度が高い
	4.欠席することなく参加している	単位に必要な出席回数を満たしていない	欠席2回・もしくは遅刻2回以上	欠席1回・遅刻は2回以下	欠席1回・遅刻なし、もしくは1回以下	欠席なし・遅刻1回	欠席・遅刻なし

第3表 「ビジネス実務演習」ルーブリック評価表（試案）

評価項目	評価基準						
	0点	1点	2点	3点	4点	5点	
実務に対する取り組み	1.社会に目を向け、実務に対する取り組みができる	新聞・ニュースを全く見ない	ニュース・新聞をたまに見る	ニュース・新聞は見るがまとめていない	ニュース・新聞を見てまとめることができている	ニュース・新聞をまとめて私見を記載している	ニュース・新聞をまとめて私見を発表できる
	2.企業の求める人材の資質が理解できている（小テスト）	理解が全くできておらず資質も備わっていない	理解には程遠い	やや理解はできているが不十分である	半分程度しか理解ができている	理解はできているがあと一歩である	小テストでの理解度も高く資質が備わっている
	3. 実務に必要な職務知識が理解できている（小テスト）	理解が全くできておらず資質も備わっていない	理解には程遠い	やや理解はできているが不十分である	半分程度しか理解ができている	理解はできているがあと一歩である	小テストでの理解度も高く資質が備わっている
	4. 実務に必要な一般知識が理解できている	理解が全くできておらず資質も備わっていない	理解には程遠い	やや理解はできているが不十分である	半分程度しか理解ができている	理解はできているがあと一歩である	小テストでの理解度も高く資質が備わっている
	5. 実務に必要なマナー・接遇が備わっている	理解が全くできておらず資質も備わっていない	理解には程遠い	やや理解はできているが不十分である	半分程度しか理解ができている	理解はできているがあと一歩である	小テストでの理解度も高く資質が備わっている
	6. 実務に必要な技能が備わっている	理解が全くできておらず資質も備わっていない	理解には程遠い	やや理解はできているが不十分である	半分程度しか理解ができている	理解はできているがあと一歩である	小テストでの理解度も高く資質が備わっている
ペア・グループ演習への取り組み	1.傾聴力	目を合わせず、他のことをしているなど聴いていない	聴いてはいるが目を合わせず傾きもない	目を合わせて聞いているが傾きなどはない	目を合わせ、傾くなどして話は聴いているが表情が硬い	目を合わせ、傾くなどして柔らかい表情で聴くことができるが、質問などはない	目を合わせ、傾くなどして柔らかい表情で聴くことができ、興味を持って質問などもできる
	2.積極性	積極性がなくペアワークでも全く話をしない	しかたなくペアワークでは隣と話す	ペアワークでは話すがグループワークでは自ら発言しない	ペアワーク、グループワークともに発言するが、やや積極性に欠ける	ペアワーク、グループワークともに積極的に発言するが、代表としても発表するなどはしない	ペアワーク、グループワークともに積極的に発言し、代表としても積極的に発表する
	3.課題に積極的に取り組んでいる	課題を提出しない	半分程度の課題提出しかできておらず、内容も不十分	時々課題の提出を忘れ、内容も不十分である	課題は忘れず提出するが内容は充分と言えない	課題は忘れず提出するが内容はやや理解度に欠ける	課題を忘れず提出し、内容も理解度が高い
	4.欠席することなく参加している	単位に必要な出席回数を満たしていない	欠席2回・もしくは遅刻2回以上	欠席1回・遅刻は2回以下	欠席1回・遅刻なし、もしくは1回以下	欠席なし・遅刻1回	欠席・遅刻なし

第4表 「接遇演習」ルーブリック評価表（試案）

評価項目		評価基準					
		0点	1点	2点	3点	4点	5点
接遇に対する取り組み	1.敬語に対して理解ができています	敬語が全く理解できていないし使うこともできない	敬語の理解は不十分で使うこともできない	敬語をやや理解し、多少使うことができる	敬語を理解し、多少は使うことができる	敬語を理解して使っているが使いこなすには不十分	敬語を理解し使いこなすことができる
	2.接遇の知識に対して理解ができています（小テスト）	理解が全くできていない	理解には程遠い	やや理解はできているが不十分である	半分程度しか理解ができていない	理解はできているがあと一歩である	小テストの点数も高く理解ができています
	3.接遇に必要な挨拶ができる	しようとする気もなく、全くできない	しようとする気はあるができない	しようとする気はあり、人からされればややできる	しようとする気持ちもあり、人からされればやる	挨拶はするが積極性は十分ではない	積極的に自ら明るい挨拶ができる
	4. 接遇に必要なお客様対応ができる	理解が全くできておらず対応もできない	理解はややできているが対応はできない	理解はややできているが対応も少しできる	理解はできており対応も型通りにはできる	理解はできており一通りできるが感じの良さが足りない	理解は十分できているが、対応も感じよくできる
	5. 接遇に必要な臨機応変な対応ができる	理解が全くできておらず対応もできない	理解はややできているが対応はできない	理解はややできているが対応も少しできる	理解はできており対応も型通りにはできる	理解はできており一通りできるが感じの良さが足りない	理解は十分できているが、対応も感じよくできる
	6. 接遇の際感じの良い表情で対応ができる	理解が全くできておらず対応もできない	理解はややできているが対応はできない	理解はややできているが対応も少しできる	理解はできており対応も型通りにはできる	理解はできており一通りできるが感じの良さが足りない	理解は十分できているが、対応も感じよくできる
グループ演習への取り組み	1.傾聴力	目を合わせず、他のことをしているなど聴いていない	聴いてはいるが目を合わせず傾きもない	目を合わせて聞いているが傾きなどはない	目を合わせ、傾くなどして話は聴いているが表情が硬い	目を合わせ、傾くなどして柔らかい表情で聴くことができるが、質問などはない	目を合わせ、傾くなどして柔らかい表情で聴くことができ、興味を持って質問などもできる
	2.ロールプレイ演習への積極性	積極性がなく参加しない	しかたなく参加し積極性は見られない	ペアワークでは話すのがグループワークでは自ら発言しない	ペアワーク、グループワークともに発言するが、やや積極性に欠ける	ペアワーク、グループワークともに積極的に発言するが、代表としても発表するなどはしない	ペアワーク、グループワークともに積極的に発言し、代表としても積極的に発表する
	3.課題に積極的に取り組んでいる	課題を提出しない	半分程度の課題提出しかできておらず、内容も不十分	時々課題の提出を忘れ、内容も不十分である	課題は忘れず提出するが内容が充分と言えない	課題は忘れず提出するが内容はやや理解度に欠ける	課題を忘れず提出し、内容も理解度が高い
	4.欠席することなく参加している	単位に必要な出席回数を満たしていない	欠席2回・もしくは遅刻2回以上	欠席1回・遅刻は2回以下	欠席1回・遅刻なし、もしくは1回以下	欠席なし・遅刻1回	欠席・遅刻なし

V. 外部試験・検定試験の活用

学修成果の把握に際し、その客観性を担保するために外部試験の利用も考えられる。

入学予定者に対して、旺文社の通信指導により「大学での学び方」を受講してもらっている。このプログラムは、「文章の書き方」「ノートの取り方」「レポートの書き方」からなり、合格が内定してから入学までの期間、勉学に対するモチベーションを維持し、入学後の学習意欲が向上するようにしている。

入学直前の3月末に、全員を集めてのスクーリングを行っており、その際に、「コミュニ

ケーション力」のプレースメントテストを実施し、テスト結果を入学後の個別対応に活かしている。

入学後、短大教育を受けたあとの「コミュニケーション力」の測定も計画しており、成長度合いを測定予定である。

かつて、社会人基礎力などの学修成果を測るための外部テストとしてPROG（社会人基礎力テスト）を用いたことがある。入学時点と卒業時点の2回を実施したが、いくつか問題点があった。

1. 四大生向けのテストであり、短大生に向いていないかもしれないこと。
2. 評価結果が安定していないこと。学生は成長しているはずなのに、2度目のテストの結果が悪い。
3. 学生の成長度合いが、2回のテストの差分として必ずしも測定できないこと。

外部試験として、資格の検定試験を活用することを始めている。従来からの「秘書検定」と「ビジネス文書検定」に加え、「サービス接遇検定」を積極的に利用し始めている。これらの検定試験結果の分析も、学修成果の把握の1手段である。

VI. まとめ

学生の学修成果を把握する手段として、これまでも検定試験を利用してきた。たとえば、すべての学習に読み書きの力は重要で、「ビジネス文書Ⅰ」と「ビジネス文書Ⅱ」の授業科目を用意し、学修成果は「ビジネス文書検定」で評価してきている。今後も、検定試験は活用していきたい。

教育活動は、教員個人によるものではなく、集団によるものである。今回は限られた科目で評価しているが、当然のことながら、その教育成果はすべての科目の教育成果である。

能動的学修は、「反転授業」に代表されるように、授業外学習が重要である。ところが、学生の「学修行動調査」により、予習・復習の時間がきわめて不十分なことがわかっている。シラバスで、事前・事後学修内容を記述するようになってはいるが、授業外学習を評価する仕組みを伴わないと事態は変わらない。学修成果を向上させるためにも、取り組んでいきたい。

新しい試みについては、学生の授業評価アンケートにより改善していきたい。